

第9回札幌文化芸術未来会議 議事概要

■日時：令和3年12月22日（水）13：00～

■会場：北海道教育大学札幌駅前サテライト「教室1」

■出席者

委員：伊藤 千織／伊藤千織デザイン事務所 代表
漆 崇博／一般社団法人A I Sプランニング 代表理事
尾崎 要／アクトコール株式会社 代表取締役
木野 哲也／ウタウカンパニー株式会社 代表
古家 昌伸／元北海道新聞記者
小島 達子／株式会社 tatt 代表取締役
酒井 秀治／株式会社 SS 計画 代表取締役
八條 美奈子／札幌フルーツ協会 副会長
関 鎮京／北海道教育大学岩見沢校 准教授
森嶋 拓／北海道コンテンポラリーダンス普及委員会 委員長
山本 雄基／画家

欠席：大友 恵理／社会福祉法人ゆうゆう 芸術文化推進室 学芸員
カジタ シノブ／インタークロス・クリエイティブセンター ディレクター
佐久間 泉真／市民委員

事務局：札幌市市民文化局文化部長 有塚 広之
札幌市市民文化局文化部文化振興課長 木戸 拓史
札幌市市民文化局文化部文化振興課企画係長 高橋 由美子
札幌市市民文化局文化部文化振興課企画係 下山 竜平

■議事概要：

1 グループディスカッションにおける議論のポイント

文化芸術創造活動支援事業の仕組みに関するグループディスカッションを行うにあたり、事務局から当該事業の進捗状況の説明や関委員長からグループディスカッションにおける議論のポイントについて説明を行った。

(1) 事務局説明

文化芸術創造活動支援事業の進捗状況等について事務局から説明した。

(2) グループディスカッションにおける議論のポイントについて（関委員長説明）

今回会議で実施するグループディスカッションにおける議論のポイントについて、資料1に基づき関委員長から説明された。

【関委員長からの説明要旨】

- 今回のグループディスカッションのテーマである文化芸術創造活動支援事業について、その目的は緊急的支援の実施であり、枠組みとしてはコロナに関する緊急的支援ということで予算要求されている。
- ここでのポイントは緊急的支援であるということのほか、文化芸術団体、アーティストの活動を継続、発展させるための事業であるということ。
- この事業では、市がプロジェクトに直接支援するのではなく、アートマネジメント人材の育成を狙いとして、中間支援組織に対して支援を行い、中間支援組織から芸術団体やアーティストに支援していくという仕組み。
- 本日のグループディスカッションでは、主に「①選考評価委員会」「②審査基準のあり方」「③中間支援組織の事業評価方法・指標」「④その他」という4つのポイントで話し合ってもらいたい。
- 最初の議論のポイントである「①選考評価委員会」において具体的に議論してほしいこととして、1つ目はその業務内容について。例えば、補助対象事業の選考、補助事業の効果及び成果の検証など。ほかには、応募者と直接コミュニケーションを取る場をつくるなど。これは、採択されて終わりではなく、どこが評価されて採択されたのか、あるいは、なぜ採択されなかったのかについて、説明責任を持って伝えるということも大事だと思うため。また、採択した補助事業を視察して、中間支援組織の関係者等に対する実施状況等のヒアリングも役割として必要だと思う。そのほか、委員会の構成人数や任期、構成メンバーなど、自由に意見をいただきたい。
- 「①選考評価委員会」において議論してほしい2つ目は選考評価委員会の審査、選考の流れ。これには主に三つくらいのパターンがあると考えている。パターン1は、1次審査と2次審査を設け、1次審査は書類選考、それを通った場合は2次審査の面接を実施するというもの。
- パターン2は、1次審査と2次審査を設けるが、2次審査で申請内容に関するプレゼンテーションの機会を設けるというもの。
- パターン3は、2次審査を設けず、書類審査、プレゼンテーション、面接の全てを1次審査で行うというもの。ほかにも、面接やプレゼンテーションの機会は設けず、書類審査のみで採択事業を決定するという方法があり得る。

- 次の議論のポイントは「②審査基準のあり方」について。この事業では三つのテーマを設定しているが、テーマ別に全て異なる審査基準を設けるべきか、あるいは、共通の審査基準を設けて、テーマ独自の基準を組み合わせる方法がいいのか、さらには、全てのテーマに関して統一の審査基準を設けるべきかといったことがある。
- 評価項目について、他団体の事例をいくつか紹介する。まず、アーツコミッション・ヨコハマのクリエイティブ・インクルージョン活動助成では、先駆性、弾力性、持続性、多様性、実現性、影響力が評価項目となっており、一方で、創造産業振興助成では、計画性、創造性、地域性、斬新性が評価項目とされている。目的に合わせて評価項目を変えているということ。
- 芸術文化振興基金は「運営に関し、活動の予算積算が明確、かつ、適切であること」「団体の運営が適正であること」など評価項目をキーワードではなく文章化しており、運営にも評価項目があるのが特徴。
- 公益財団法人沖縄県文化振興会では、三つの取組に対して助成する事業があり、その事業では、事業実施の確実性、事業内容の妥当性、事業の持続的発展の可能性、事業の新規性を共通の評価項目として挙げているほか、取組ごとにも評価項目を設けている。その取組の一つである「文化芸術の享受者の拡大に資する魅力的な創造発信に行う取組」では、文化芸術の普及及び魅力発信、県内文化芸術の享受者の創出拡大という独自項目を設けている。「文化芸術資源を活用した地域の諸課題の解決を促進する取組」では、諸課題の解決、異分野の団体等との連携体制、文化芸術の社会的役割の創出拡大という評価項目を設けている。
- セゾン文化財団では、独創性、将来性、適時性、影響力、実現性という全て統一の評価項目を設けている。このように統一の項目を設けることで、助成事業を行う目的が非常に明確になっている。
- 次の議論のポイントは「③中間支援組織の事業評価方法と指標」について。実施した事業の評価に当たり、採択する事業の選考を行う者が事業評価も行うのか、事業評価は別組織に任せよう方がいいのか、様々な考え方があろう。事業評価の方法に関しても、定量評価だけか、定量評価と定性評価の組み合わせか。ただ、文化芸術は定量的に測ることがなかなか難しいので、定性評価だけでいいという考え方もあるかもしれない。
- 事業評価結果の公開有無について、事業評価をした後、広く市民に見てもらうことも大事だと考えるが、この辺りの意見をいただきたい。
- 今回最も重要視しているのがアートマネジメント人材育成。どのような基準を設けて事業評価すべきかについても意見を聞きたい。

- 次に、事業評価を行うに当たり、どのようなポイントを重視すべきかについて意見を聞きたい。例えば、事業の目的と実際に実施された事業内容に整合性が取れているかというポイントを重視すべき、あるいは、どのような実施体制で、どの分野とどのように連携を取ったのかという点を重視すべきなど。
- また、中間支援組織として札幌市の文化芸術の発展に貢献する意思の程度をどのように確認すべきかについても考えていただきたい。
- 最後の議論のポイントは「④その他」で、例えば、3つあるテーマのうちどのテーマを優先するかということ。文化部が現在要求している予算が満額つかなかったときに全てのテーマを設定すべきか、あるいは、予算に合わせて、今回は一つのテーマに絞るのか。
- 次に、各支援テーマに沿った事業を実施しようとするときに、最低、どれくらい予算が必要だと思うか意見を聞きたい。また、一つの間支援組織が複数の支援テーマに応募した場合、評価点が高ければ全て採択すべきなのか、あるいは、制限を設けるべきなのかについても考えてほしい。例えば、1つの団体につき複数の応募を可能としても、採択するのは1団体につき1提案に限るとすることも考えられる。

(3) 委員からの質問及び事務局の回答

- (伊藤委員) アートマネジメントについて文化芸術基本計画にどのように盛り込まれているのかお聞きしたい。また、アートマネジメントについて、役所の中でその必要性をどの程度感じているのかお聞きしたい。
- ⇒ (事務局) 文化芸術基本計画(第3期)には、いろいろな施策が盛り込まれており、その中には『文化芸術をつなぐ新たな役割の育成支援』という施策がある。基本計画中には、『文化芸術の持続的な発展には、創造する側、鑑賞する側、場の提供者、支援者など、様々な関係者の間に入り、事業全体の仕組みを調整し、創り上げていくアートマネジメントはなくてはならない機能であり、文化ボランティアも重要な人材です。このような担い手の社会的意義等についての理解も促しながら、人材の育成や支援についての取組を行い、自発的な活動の広がりにつなげていきます。』と記載がある。そして、その主な取組として『アートマネジメント機能の強化』があり、その内容は『アートマネジメント人材の能力向上とネットワーク形成を目的とした講座やワークショップを開催し、文化芸術活動の質の向上と活性化を図ります。』と記載されている。また、別の主な取組として『アートマネジメントの人材育成、活動支援』があり、『文化芸術に親しむことができるイベントを企画、実現していくスキルを習得するための研修等を実施し、ボランティア

一な活動を通して文化芸術と人々をつなぎ、地域コミュニティを活性化させる市民の育成に取り組みます。』と書かれている。さらに別の取組として『アートボランティアへの支援』があり、『文化芸術に関するイベント、団体、施設等の趣旨に賛同して、魅力向上や運営の支援に関するボランティア活動を行う団体の情報提供を行うなど、自発的な活動を行う人の活動の輪を広げる取組を行います。』という記載がある。アートマネジメントという言葉が役所の中で理解されているかという質問について、おそらく理解されていない状況だと思う。その理由として、いろいろな活動の発表の場や多様な文化芸術に親しむ機会の提供といった、様々なイベントの企画や施設の整備といったことは役所が得意な分野で、分かりやすいものなので、今まで着々とやってきたということがある。それに対して、アートマネジメントといった事柄については認知度が非常に低く、まだ広く理解されていないという印象がある。

2 文化芸術創造活動支援事業の仕組みに関するグループディスカッション

関委員長と酒井副委員長を除いた出席者9名を下記の3グループに分けてグループディスカッションを行い、その後、各グループの代表者から内容について発表された。

《グループ構成》

- Aグループ：森嶋委員、漆委員、木野委員
- Bグループ：山本委員、尾崎委員、古家委員
- Cグループ：伊藤委員、小島委員、八條委員

(1) Aグループの発表（発表者：漆委員）

- まず、選考評価委員会について、中間支援組織にきちんと寄り添う、同伴してやっていくようなタイプのチームにならないといけないという理由から、選考評価委員会という名前を変えたいというところから話がスタートした。
- 中間支援組織の理想としては、プログラムオフィサーのような役割を持つ人がおり、最終的な支援先まできちんとアドバイスができる機能があるというように、単純に選考して評価する機能だけではないほうが良いという意見があった。
- 応募者と直接コミュニケーションを取る、採択プロジェクトを視察するほか、中間支援組織の関係者等のヒアリングにとどまらず、助言を行うなど、そういった寄り添い方ができるといいのではないかということ。
- 審査員は、俯瞰的に状況を把握し、中間支援についてきちんと理解している専門家がいい。また、事業選考時の審査基準が事業評価の基準と一致していないと意味がないため、そういった見識をきちんと持った人に審査員を担ってもらふ必

要がある。

- 事業選考時の審査方法について、1次審査と2次審査があり、申請してくる中間支援組織がプレゼンできる場がないといけないということが話された。初めての仕組みなので、申請者が考えていることをきちんと理解する上ではプレゼンテーションを実施する必要があるだろうということ。ただ、応募数が少ない場合などは、2次審査を行わず、1次審査で書類審査、プレゼンテーション、面接を行うといった方法もあると考えた。
- 事業選考時の審査の在り方について、基本的には、三つのテーマごとに重視すべき観点のようなものが必要だと考えた。例えば、創造活動活性化でいえば、緊急性。どこに課題があるのかを応募者が明確に把握し、その解決の仕組みが提案されているか、審査する側も読み解いていかなければいけない。テーマごとに審査するポイントが変わってくるだろうと考えた。ただ、そのポイントを押さえられているからといって、その団体が中間支援組織を担えるかどうかはまた違う話になる可能性もある。そのため、各申請者が持っている能力、例えば、人材や資金力、あるいは、そもそも信頼に足る団体なのかどうかを測るための条件が必要になってくるのではないか。
- 人材育成やアートマネジメントの機能強化については、提案される仕組みがアートマネジメント人材が育成されるような枠組みになっているかどうか、それが2次的に含まれているものを考えたとき、条件の中にそういった人材育成の観点が含まれているかどうかの一つのポイントになると考えた。
- 我々が考えなければいけないのは、中間支援をする人たちがどういう人たちなのか、どういうことをやろうとしているかということ。何をもちて中間支援とするかに重きを置いた観点が審査の基準にならないといけないのではないか。
- 次に、事業評価の方法について、前述したように、審査をするときの基準がイコール評価の基準にならなければいけないということが一つある。今の段階でどう評価していいかが分からないということがあるのであれば、どう審査しようかというところから評価基準を設定する必要があると考えた。
- 審査員について、審査員は評価に入ってもらったほうがいいと思う。それは、一部であっても、全員であってもいい。ただ、評価については、より客観的な分析や解析が必要になるので、そういう専門性を持った研究者なり、シンクタンクのような、外部の人間が数名入るということもあり得るだろうと考えた。審査員が全部で5人の場合、3人が評価委員として残って、2人を外部から呼んでくるでもいい。また、5人全員を残し、2人追加で評価に入ってもらってもいい。
- 要求とおりに予算がつかなかった場合に優先すべきテーマについて、コロナの

切迫した状況が、もしかしたら、来年以降、少し緩和されている可能性もあるということを考えると、持続的、発展的に札幌全体の芸術文化の基盤を強化していくことに支援をしたほうがいいのではないかということが話された。そのため、活動基盤強化や環境改善の部分が優先順位としては高いのではないかということ。そして、挑戦的活動支援、最後に創造活動活性化という優先順位をつけた。

- 最後に、一つの団体が複数のテーマに応募した場合、制限を設けるべきかについて、取りあえず、今年度に関しては、複数応募可でいいのではないかなった。スタートの年なので、ある程度、評価に値する確実性を持った団体にまずはやってもらおうという意識が働いたときにもったいないことにならないといいということ。複数応募を可にして、ある程度、力量のある団体がどこかのテーマできちんと支援事業を担えるように設計されていたほうがいい。
- 審査や事業評価については、中間支援組織を対象としたものなので、ややこしいところ。最終的な事業評価のときに、中間支援組織が支援した対象のさらに先の成果まで含めて評価をすべきなのか、中間支援組織がまとめた成果に対して評価をすべきなのか、どこまでの影響を加味して評価するのは非常に難しい。あくまでも責任が持てるものとすれば、中間支援組織が申請した内容を審査して採択し、そこから上がってくるフィードバックに対して評価する、この関係性が一番重要だと考えると、あまり先まで読んで定量的に測ってみようということはないのではないか。
- (木野委員) 応募者がどういう観点から中間支援の仕組みをつくり上げるのかということとはとても大事。こういうふうに仕組みを作りたい、こういう解決力を持って臨みたいというときに、たくさん世の中を見渡しているか、全体の課題をどう捉えているか、業界のことを知っているかなどは大事だと思う。
- 今からネットワークをつくる団体と、既にある程度のネットワークを持つ団体とでは、初年度の審査基準としては後者に分があるかと思う。ただ、今後もこの事業が継続するのであれば、新規の中間支援を担える団体になるべく手を挙げやすい状況はつくっていくべきだと思う。

(2) Bグループの発表（発表者：尾崎委員）

- まず、選考評価委員会は公開したほうがよい、公開されるべきという話があった。また、この事業を進めていく上で、選考委員に払われる報酬や事業を取りまとめる組織の運営費等の費用が発生すると思うが、そこはなるべくミニマムにし、中間支援にお金が行くように、または、その下のアーティストにお金が行くような仕組みができればいいということが話し合われた。

- 審査について、組織を審査する際はある程度厳しく見ていかなければいけないが、事業についてはその可能性を見ていく必要があるのではないかと話された。組織は手堅く、事業は自由度高くということ。
- 選考委員会にこの未来会議の人たちが入るのかも話し合った。僕らは1年ぐらいかけて話し合い、つくり上げてきたわけで、この事業の骨子を一番分かっている人間だが、未来会議の委員の中からも応募する人が出てくると思われるので、そこはきちんと切り分けて考えないといけない。また、選考委員として道外から来てもらうのは最初の方は仕方がなく、むしろ、その方が公平に中間支援組織や事業のことを見られるのではないかと話があった。
- 次に、補助対象条件として、事業が行われる場所に市内や市外という条件があるのかということがある。例えば、作品の個展が東京で行われるとなった場合、それはこの事業に当たるのかどうかということ。創作活動が市内で行われている場合は、対象になるべきなのではないかと話があった。ただ、これはジャンルにもよると思う。例えば、道外から来たアーティストが札幌市で演劇の公演をするのは当たるのかどうか。物によって札幌市の関わり方が違うので、こうではなければいけないとするのではなく、個別にそれぞれを見ていく必要があるのではないかと話し合った。
- 審査・選考方法について、1次審査で書類審査を行い、2次審査でプレゼンテーションと面接を行うパターンか、2次審査を設けず、1次審査のみで書類審査、プレゼンテーション、面接を行うパターンであろうとなった。ただ、大事なものは面接とプレゼンで、選考委員と応募者がコミュニケーションを取れるものが必要ではないかと話し合った。
- 中間支援組織の運営費について、これは当然認められるべきだと考える。ただ、これには、上限金額を定める必要があるという意見と、上限金額は定めず、運営費の金額も含めて審査するのがいいのではないかと二つの意見が出た。
- 次に、事業評価について、当然公開するべきだが、どうやって評価すべきかということ話し合った。例えば、イベントを行う事業で、そのイベントを見た人のアンケートがそれに当たるかどうかといたら、それは難しいだろうということ。そうではなく、応募者である中間支援組織が支援するアーティストたちからアンケートを取る方法がないだろうかという意見があった。それを中間支援組織の評価の一つとすることもありではないかなということ。
- 一つの間支援組織が複数の支援テーマに応募するのを可能とするかどうかについて、これはいい事業が選ばればいいだけの話であり、可能としていいのではないかと話があった。

- 中間支援組織について、この会議のメンバー内でも思っているものに違いがあると思う。それを一つに統合する必要はないが、もう一回、話し合っておいたほうが良いと思う。
- 個人的な考えとして、中間支援組織は札幌市内に10や20もある必要はないと思っている。5年先、10年先、20年先には、それが二つ三つにいろいろ統合されたりしていったって、大きな規模の組織に、なおかつ、その組織の中に行政も入り、また、民間の力が入っている、そういった組織が二、三あって、その中間支援組織が札幌の文化行政の核になっていくような未来が理想だと思う。当然、そうなると、幾つも事業をやらなければいけない。そういう前提だとすると複数のことを行っていくのは当然のことだろうということ。
- (山本委員) 市外や市内の話について、中間支援組織は市内の組織だけでは数が少ないだろうという予測もできるし、どう選んでも身内が関わってきてしまうということもあるかもしれない。そのため、中間支援組織も全国へと公募し、テーマによって、例えば、市内の作家限定にする、全国の作家にするなど、どんな表現者を対象にするかの条件をつけるなどして、幅は広くしておいたほうが良いのではないかという話もあった。
- (古家委員) この事業に要求とおりの予算がつかなかった場合に、どのテーマを優先するかについて。個人的な意見だが、コロナ対応の枠だということなので、何となく創造活動活性化が優先されそうな気はする。だが、ほかのものも当初から入れておかないと、後でつけることができなくなるのではないか。そのため、予算額の内訳については傾斜配分してもいいので、項目は全て残すべきではないかと考える。

(3) Cグループの発表(発表者:八條委員)

- そもそも中間支援組織とは何だということについて話し合った。中間支援組織の定義づけがはっきりしていないということ。
- 先ほどのアートマネジメントに関する事務局の説明の中で、ボランティアという言葉が何回か聞こえてきたが、アートマネジメントをボランティアでやるとなると、それが持続するかということは疑問に思う。そして、ボランティアではない、プロのマネジメントというのはどういう人がやるのか。また、育成とは、具体的にどうすればいいのかをしっかりと考えないといけないという意見があった。そういった定義づけなどをもう少ししっかりと、その上で議会や札幌市民に理解してもらえると、この事業を進められると思う。
- まず、選考委員会について、審査員名は公表すべきと話し合った。公平性や透

明性は必ず担保すべき。また、事業が行われた後に審査員名を公表するのでも構わないのではないかという意見もあったが、審査員が名前を公表して選考に当たるべきであろうという話になった。また、選考委員会の中には、ちゃんとした専門家を含めるべきであるということも話された。

- 審査について、要綱が難し過ぎる、申請は作文がうまい団体が有利になってしまう、書類や会計がすごく負担だという意見があった。可能であれば、申請のときの書類やフォーマットなどは少し優しいもののほうが出してもらいやすいのではないか。
 - 審査方法について、何らかの面接やヒアリングは絶対に必要という意見は一致しており、事業に対する思いなどを示していただくべきという考え。また、不採択になった場合に、どうして駄目だったのか、理由説明をしてもらいたいだろうという意見があった。
 - 事業評価について、まず、事業の持続性はすごく大事だということが一つ、そして、札幌に対する貢献があるべきということ。市外のアーティストの参加や、市外での公演や発表など、色々なケースがあると思うが、最終的に、札幌市民に対して文化的な還元ができるということが重要なので、何らかの形で札幌に対する貢献をしているということが示せる事業であるべきだが、その人は札幌市に住んでいる必要はないということ。そして、その評価は、最初に選考した選考委員が最後まで見届けるような形で事業評価も行ったほうが良いという考え。
 - (伊藤委員) 難しい言葉の中に集約され過ぎていて、抽象的で分からないところがある。例えば、ジャンルによっては、プレゼンテーションの意味が違うということもある。つまり、応募する側の目線で見ると、すごく難しいということ。慣れていない人たちにとっては、まず、記載する作業自体が負担で、応募を止めるということにもなってしまうので、その辺を分かりやすくしてほしい。
- ⇒ (関委員長) 中間支援組織とアーティスト・芸術団体との関係性がすごく大事で、中間支援組織が支援をするのでトップダウンの形になってしまうこともあり得るが、そうではなく、アーティストと芸術団体、それから、中間支援組織はフラットの関係で対等にやっていき、中間支援組織が芸術団体やアーティストの意見を吸い上げ、支援をしていくというところがすごく大事だと思う。

(4) 各グループ発表の総括 (酒井副委員長)

- 札幌市が選考評価委員会の委員を任命して、一体となって募集要項をつくり、三つのテーマに基づいて中間支援組織から事業を募集する。このとき、選考評価委員会に関することが一番のテーマだと思う。Aグループの発表で名称を変える

という話があったが、具体的な名称の案は出てきたか？

⇒（森嶋委員）それは出てきていないが、選考評価委員というだけでネガティブなイメージを持っている人もいると思う。

- 選考評価委員会がトップダウンで物を言うのではなく、寄り添う、助言もする、選考評価委員会内のプログラムオフィサー的な人が同伴していくということが名前にも表れたほうが良いということだと思う。
- 審査の流れについて、市が中間支援組織を選考する際は、コミュニケーションを取ることが必要だし、ヒアリングも必要。そのため、書類審査の1次審査、面接とプレゼンテーションの2次審査を設けるという方法をベースに考えていくということ。ただ、応募者が少ないことも考えられるので、応募数によって考える必要がある。
- また、選考評価委員会が選考をするプロセスは透明であって、公開されるべきということ。どんな委員かを見ながら応募するわけだから、委員名は公開されるべきだと思う。
- Bグループは、仕組み自体は手堅く、事業をする人にとっては自由度を持ったものではなければいけないという話だった。
- Cグループでは、不採択になったときの話があり、次に応募する人にとっては、原因は何だったのかを知りたいと思うので、不採択となった理由を説明する必要があるという意見があった。
- 審査基準について、これは、評価とつないで考えなければいけないというAグループの意見があったが、ここでは、団体の能力、資金力、人材をベースで見なければいけないと思う。また、支援プログラムの中身を評価する仕組みも必要。それから、Bグループが言っていたのは地域性。札幌への貢献みたいなことと地域性をどう捉えるかということ。そして、運営費の扱い方。事業計画を出してもらうことになると思うが、どういうふうに人材育成に結びつけるような人件費の扱いをしているかも評価しなければいけない。また、人材育成の仕組みが本当にあるのかということが入ってこなければいけない項目だと思う。
- 予算要求とおりの金額がつかなかった際に優先するテーマについて、今回は最初なので、全てあったほうが良いだろうということ。一方で、活動基盤が一番必要なのではないかという意見もあった。
- （木野委員）中間支援組織の自由度は非常に高く、例えば、募集や審査もなしで、支援先を決めることさえ起こり得る。それを選考評価委員会がどう見るか。中間支援組織にはマザーシップのような性質もあり、支援先のアーティストや芸術団体に同伴や伴走する在り方がどうなのか、どこを見ているのかということで、結

果的に人材育成をどう組み込んでいくのか、その人材育成をする仕組み自体をどう考えていくのか、これを中間支援組織に求めたい。そうしたときに中間支援組織が限られてくるのか、どれだけ能力を持っていなければいけないのか。

- （森嶋委員）課題の把握と解決力がすごく大事だと思う。まず、目の前に困っている人がいることを知っているのが大事。そして、その人を助けるためにはどういう方法があるか、それを提案するのが中間支援組織だと思う。それが行政だとなぜ駄目なのか、民間ではなければ駄目なのかということ、どんなに優れた組織であっても日陰は絶対にできてしまうと思うから。そして、その日陰に困っている人がいるが、そういう人を見つけるためにそこに寄り添ってくれる人が必要で、それが中間支援組織だということ。ただ、選考評価委員会などの審査員チームも中間支援組織を支援する組織であってほしいと思う。ただ、公益性も大事なので、最終的にこの成果を市民や行政の方にPRすることがすごく大事だと感じた。それは、成果に対して関わった人全員が理解することが大事だと思うから。何のためにこれがあったのか、それはお金を出す側も大事だし、税金を払う側も大事だし、そうなるという世の中になっていくのではないかと思う。
- （漆委員）Cグループで、中間支援とは何か、申請書類などは優しいものがないという話が出たが、すごくいい指摘だと思った。例えば、中間支援組織がアーティストや芸術団体に対して何かしらの公募をする仕組みが採択されたとして、その公募に対しアーティストや芸術団体が表現者として申請するようになるときに、申請方法はシンプルなものであってほしいということだと思う。
- （古家委員）選考委員の選び方は慎重にしなければならないと思う。選考委員が選考対象の応募者とつながっていたり、どこかで一緒に活動している人だったりすることもあり得る。それでも公平性がちゃんと担保できるのかということがある。しかし、そのような選考委員が入ったらまずいとなると相当限られてくる。アーティストと一緒に活動している人は選考委員になれないというのも困るのではないか。もう一つ、アートマネジメント人材の育成を考えるのであれば、中間支援組織には必ずマネジメントの責任者を置くと定め、誰が責任を持って選ぶのか、誰が事業を組み立てるのか明確にし、その人がちゃんと仕事できたかどうかを評価基準にするのはありだと思う。
- （尾崎委員）アートマネジメント人材の育成について、わざわざ人材育成をしなければいけないとするのではなく、この仕組みを進めていけば進めていくほど、この事業の予算がつけばつくほど、中間支援組織、イコール、アートマネジャーが拡充されていくと考えている。そのため、直接的な人材育成をするのではなく、これが動いていくことによって人材が育成されていくのだと思っており、わざわざ

ぎ、そこを取り上げて、それに対して何かをする、誰かを呼んでワークショップをする、講座を開く必要は全然ないと思う。

- （木野委員）選考委員とこの事業に応募する中間支援組織とのつながりについて、つながっていないということのほうが不自然だと感じている。
- （関委員長）こういった選考評価委員会であつながつてない人を選ぼうとして、それで年齢の高い人が選ばれたりするが、それは避けたほうがいいと思う。それに、今を分かっている人に入ってもらわないといけないとも思う。また、選考評価委員が5年も6年も務めるということになる場合、やはり癒着が生まれてくると思うので、ちゃんと任期を設けて、再任できないようにするなどの方法はあるかもしれない。
- （事務局）議論を聞いていて、非常に示唆に富んでいる会議だと思った。改めて、中間支援とは何か、アートマネジメントとは何かという根本のところについての話題があつたが、そもそもの定義をしっかりとしないと、我々も皆さんに説明できないし、理解もされない。その根本のところはもう一回しっかりとやらなければ駄目だと思った。それから、この事業が将来的にどうあるべきかをしっかりとイメージしながら、そのために、今どうするのか、来年度以降はどうするのかを考えていかないと、うまくいかないだろうなと思っている。将来的なゴールが必ずしも見えているわけではないが、こうあつたらいいというものをイメージしながら進めていく必要があると改めて思ったところ。また、中間支援組織に求めるものについて、伴走者としての期待がある。どう育成につなげていけるのか、これは初めてやるものなので、果たしてどれほどうまくいくのかは分からないが、すごく大きな一歩だと思っている。委員名の公表、あるいは、プログラムオフィサーを置いたほうがいいなど、大きいことから小さいことまでいろいろと意見があつた中で、中間支援組織として、組織は手堅く、事業の自由度は高くという意見があり、まさにそうだと改めて思った。最後に、未来会議としての委員の任期は来年3月までとなる。未来会議としての開催は2月の頭頃に1回ぐらいになるのではないかなと思う。